

「標準生活費」算定に基づく衣生活調査報告Ⅱ

元杉野女子大家政 〇 榎山光子
杉野女子大家政 鈴木美和子

目的 第30回総会において行つた「標準生活費」算定の中間報告に基づき衣生活について実態調査を行つた。被服は非耐久的なものと同久的なものからなつており、前回、算定の全物量方式では表面化しむか、衣部分をさらに分析することとした。特に被服管理（購入↔着用↔保存↔廃棄）は個々の家庭（主に主婦）の能力や個性に伴ひかなりの差がみられる。そこで衣生活管理は主婦が中心に行つてゐることから、その家族のライフステージ、世帯主の職業、所得、主婦の家事能力、生活時間がどのように被服費に影響しているのかを細かく分析することを目的とした。

方法 アンケート質問紙による自記式留置法、都内渋谷区、世田谷区、目黒区に在住し子供のいづれかが高校生である家族を対象とした。

結果 被服の年間購入数、所持数は性別、年齢、品目別によつて差を生じている。購入理由は品目別による差が著しく、下着の場合は、身体保護機能が優先され、ブラウス、セーター、スーツ、袴等は着用者の社会的環境や個性に影響されている。また新衣に創りだされる流行によつて、手袋使用に耐えられるものでも使用しなくなる傾向がみられる。

被服管理の中で特に（洗濯、クリーニング、家庭内製作）においては主婦の職業の有無や家事能力、衣生活に対する意識（使い捨て、節約志向等）が複雑に絡み合つてゐる。さらに衣料品の用途や使用頻度によつて、その管理方法は異なり、一律に耐用年数の設定を容易にさせない理由となつてゐることがみられた。